



総合地球環境学研究所（地球研）が主催する「レジリアンス研究会」に加わり、1年かけてレジリアンスの概念の整理と研究手法の検討を行ってきた。その一環として、2004年12月13日から24日まで、南部アフリカのザンビアに研究サイト候補地の下見に行った。同行したのは、研究会の主催者である地球研の梅津千恵子氏と京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科の島田周平氏である。

レジリアンスというのは聞き慣れない言葉であろう。生態学で使われていた概念で、復元力とか回復力と訳される。生態システムの安定を乱すような攪乱が生じた時、元の安定状態に戻ることでできる能力のことである。元に戻るのに要する時間、あるいは元に戻ることが可能な攪乱の最大値により測定することができる。たとえば、連続耕作をした場合に、肥沃度が長期にわたって維持できる土壤もあれば、すぐに劣化し砂漠化してしまう土壤もある。土壤の持つこうした特性をレジリアンスという概念で捉えるわけである。

この考え方を社会科学に適用すると、家計やコミュニティのレジリアンスを考えることができる。従来の経済学的な用語でいえば、「ショックに対して消費を平準化する能力」と類似する部分もある。しかし、社会システムのレジリアンスまで含む広い概念である。地震や旱魃のような自然災害、政策の変更や戦乱のような人為的ショックに対して、家計や社会が対処する能力のことといってもよい。

「レジリアンス研究会」では、社会学者と自然科学者の学際的研究グループにより、両者のレジリアンス概念を融合した社会・生

態レジリアンスについて研究計画を立案することを課題としてきた。それでは現地を見ようということになり、島田氏がフィールドとしているザンビアに行くことになったのである。私にとっては初めての国だ。

ザンビアはスーダン・サバナ帯に属する内陸国である。南側にあるジンバブエや南アフリカへの出稼ぎや移民が経済を支えてきた。これらの点では私になじみの深い西アフリカのブルキナ・ファソによく似ている。村の人々も穏やかな感じで、それもブルキナと同じだなという印象を持った。

ザンビアを訪問した12月はちょうど雨期の始まりで、あちこちの畑で耕作が始まったところだった。下の写真のように二頭立ての牛で耕起し、その後を追ってトウモロコシの種子を蒔いていく。何の変哲もない光景だが、聞くと、この付近は10年ほど前までは保護林だったので耕作は全面的に禁止されていたのだという。保護林が解除されたわけではないのに、「開墾してもよい」という噂が広まり、周囲の村人が続々と入植してしまったのだ。確かに土地はふかふかで見ただけで肥沃な土地だとわかる。このような処女地では、肥料を入れなくともヘクタール当たり7～8トンのトウモロコシがとれるため、法を犯して入植した者は大金持ちになったとのことだ。うーむ。それを社会・生態レジリアンスの概念でどう捉えるのか。難しい問題である。

宿題が増えただけという気がした現地視察であったが、この4月になり梅津氏から「2005年度の地球研のプロジェクトとして正式に承認された」との連絡をうけた。出張の



かいがあったわけで、まずはめでたしである。社会・生態レジリアンスという未開の研究分野が、この写真のように肥沃な大地であることを強く願っている。